

「かえる合戦」

暖かい日が来たと思うとまた寒さに逆戻り…そんな日々を経て、やっとほんものの春がやってきました。

野原には色とりどりの花が咲き乱れ、日当たりのよい斜面には、モンキチョウやキタキチョウが舞っています。生きものの息吹がいっぱいの谷戸を歩いていると、田んぼに残る水たまりが、もこもこ動いています。

ヒキガエルが何匹も集まり、団子のようになっているのです。ググッ、ググッというやさしい鳴き声のわりに、一匹一匹のカエルは必死の形相です。雌のカエルにしがみついている雄ガエル、それをなんとか引っぺがして、自分がメスに乗っ取ろうとしているカエル… そうはさせまいと、先に乗った方は雌にしっかり腕を回してしがみつき、妨害者を足で蹴落とそうとキックを連発しています。

子孫を残すために無我夢中。でも、高みの見物の私たちには、なぜかユーモラスに見えて、笑ってしまいました。



キタキチョウ



散っていきます。戦いに勝ったオスだけが雌にしがみついたまま田んぼの中を悠然と泳いでいきました。

10日後、再び歩いた谷戸にはカエルの気配はなく、ただひも状のたまごが残っているだけでした。

今年も日本のいたるところでこのようなカエル合戦が繰り広げられたことでしょう。でも、『原発事故で、生きもの

たちに何がおこったか。』(岩崎書店)によると、放射能が高く立ち入りできないために放置された田んぼからいち早く消えたのが、赤とんぼやカエルだったそうです。

カエルが住み続けるためには、田んぼやあぜの手入れなどが必要なのです。懐かしい里山の風景も、農家の方たちの地道なお仕事なしにはあり得ないのだと感謝した一日でした。

(小川)

2、30分もたったでしようか、一匹の雄カエルがあきらめて、山の方に戻り始めました。それを機に、他の雄カエルも三々五々

うみつけられたヒキガエルの卵

